

読者からの手紙

宮沢賢治に学ぶ“自然のインタープリター”の視点



杉浦 嘉雄 (清里環境教育フォーラム実行委員)

最近“インタープリター”という言葉が、主に自然保護教育、野外教育の指導者たちの間で頻繁に使われるようになってきた。“インタープリター(interpreter)”とは、通訳者とか解説者の意味であり、アメリカの国立公園で活躍するレンジャーの中では、特にそこを訪れた人々に自然の楽しさや美しさを分かりやすく知ってもらうための解説員のことを示している。インタープリターとは、まさに“自然の通訳者”といえよう。

自然に関心を持たせる教育手法において、特に導入時においては、従来の自然観察や野外活動などのリーダーが“自然の情報伝達者”として単に自然に関する科学的知識や技術を参加者に教えることだけでは不十分である。

そこで、リーダーが“自然のインタープリター”として、いかに自然の魅力を引出し参加者に伝えるか、いかに自ら体験した感動を参加者と分かち合うか、という情操的な側面も重視する新しい教育手法が登場してきた。

現在日本では、“自然のインタープリター”が活用する教材やプログラム(「ネイチャーゲーム」,「地球教育」,「プロジェクトワイルド」,など)を、質量ともに豊富であるアメリカなどから、積極的に導入したり導入を試みようとしている。その中から日本の風土に合ったものを選択し、それを骨格としそこに独自の発想を加えることによって、日本におけるインタープリターの層の向上とともに、日本の風土に合った環境教育、すなわち日本型環境教育の確立を試みようとしているのが趨勢である。

しかし、環境教育の先進国の成果の導入のみならず、“日本の優れたインタープリターの先人”を見つけ出し、その業績をインタープリターとしての着眼点から再度見直す試みも、日本の自然のインタープリターの層を向上させることにつながるのではないだろうか。

優れた科学的な知性と日本の風土に育まれた鋭敏な感性を備え、数多くの自然との感動的な原体験とその感動や喜びをともに分かち合う度量を持っている。しかも、出会った自然の現象や事物それらが織なす関係そのものから、物語を語ることができる。

おそらく、これらのことが、優れたインタープリターの条件といえよう。

宮沢賢治は、この条件を備えた最もふさわしい人物の一人であろう。

彼は、生前唯一の童話集である「注文の多い料理店」の序文で、次のように述べている。

「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたものなのです。ほんとうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるへながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしたかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたままでです。」

この賢治の言葉は、自然からのメッセージやその感動をそのまま言葉にただけだという、故意の創作を否定する表明であり、同時に、賢治が自然との原体験を実際に持ち、しかも、その感動をできるだけ忠実に読者に語り伝えようとする“自然のインタープリター”としての自覚の表明ともいえないだろうか。

また、作品の中に現れる“自然のインタープリター”としての賢治のさまざまな視点は、環境教育の観点にもつながるのではないだろうか。それを箇条書に表してみる。

①科学的視点。自然現象を科学の眼で生き生きと見つめ、作品の中に自然科学用語を詩語として多く用いる。座右の書の一つは『化学本論』。自然科学の立場からも社会問題に取り組もうとした。

②学際的な視点。地質学、化学、天文学、植物学、農学などの自然科学をはじめ、社会科学、人文科学、哲学、宗教、芸術、教育などに深い理解を示し、それらを縦横無尽につなぎあわせた学際的視点を有する。

③有情体験に基づく視点。賢治童話は、動物文学という形態ではないのに、優に100種を超える動物が登場し、しかも意思を有する。その特徴は、動物のみならず、植物、石や風や山や川、さらには天体にまでいたっている。森羅万象はすべて意思を有するという有情体験がその深層にあるのであろう。それゆえに、地球上からはもちろんのこと、宇宙のあらゆるものからメッセージが送られてくるという発想につながるのではなかろうか。

④エコロジー的視点。生態学的視点という科学の眼はもちろんのこと、生きとし生けるものすべてが同朋であるというエシックスに基づいたエコロジー的視点による作品が多い。『グスコブトリの伝記』では、壮大なエコロジカルな応用実験まで提示されている。

⑤共時性原理に基づく視点。因果律によってはただの偶然の一致に見える現象にも、特別な意味を感じる視点を有する。この共時性の原理に基づく視点は、自然はもとより異空間からのメッセージを受け取るアンテナとなり得るのではないか。『銀河鉄道の夜』では、彼自身が特別な意味を感じた星々が、その物語の光景の原型となっている。

⑥マイクロコスモスの視点。一輪の花、一人の人間というマイクロコスモスのうちにも全宇宙（マクロコスモス）がそのまま写しとられているという、世界や宇宙に対する視点を有する。この認識は、賢治のもう一つの座右の書『法華経』に基づくものといわれている。この認識は、⑦にも関連していく。

⑦コスモロジー的視点。心と物の本質を別々に捉えるのではなく、心の深層と自然の深層がいかにか深い関わりを持っているのかということを探求している。このコスモロジー的視点から、自己を含む世界や宇宙を常に考えている。『農民芸術概論要綱 序論』にある「…/世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない/自我

の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する／…/正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである／…」という思想も⑥⑦の視点が関連しているのではないだろうか。“科学者の眼”と“詩人、信仰の人の眼”を両方持ちえた宮沢賢治は、偉大な自然のインタープリターであり、彼の作品は、実際に出会った自然からの語りかけを、私たち読者のために通訳した言葉であり、翻訳書である。

ここで、彼の作品を、あたかも文学的評価の高い英文和訳された翻訳書を和文英訳するかのようになり、作品の背景に隠されている自然を可能な限り見つけ出す試みを想定してみよう。この作業は、作品をより深く理解するだけでなく、インタープリターとしての視点をあらためて認識する機会となるだろう。

この意味において、彼の作品は、“インタープリター養成用のテキスト”として位置付けることができよう。そして、作品を読み、その背景となる自然に出会う体験は、優れたインタープリターとしての指導者を養成することにつながるであろう。また、このことは、自然との原体験の乏しい現代の子供たちに対しての“環境教育的な”意味をも有しているのではないだろうか。



北上川西岸にあるイギリス海岸

岩手県花巻市を流れる北上川、その支流猿ヶ石川との合流地点に「イギリス海岸」がある。賢治が最も愛した“自然”の一つであり、この名は、彼が命名したものだ。

農学校教師の賢治が、生徒たちとともに、水泳・散歩・自然の観察・化石採集など多くの自然体験を共有した“フィールド”でもあった。

このイギリス海岸も、彼の詩や童話に、“翻訳”されてしばしば登場している。